HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	ル・クレジオにおける小説世界 : 個人の危機から文明の危機へ［全文の要約］
Author(s)	櫻井, 典夫
Description	この博士論文全文の閲覧方法については、以下のサイトをご参照ください。 https://www.lib.hokudai.ac.jp/dissertations/copy-guides/
Degree Grantor	北海道大学
Degree Name	博士(文学)
Dissertation Number	甲第11593号
Issue Date	2014-12-25
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/57741
Type	doctoral thesis
File Information	Norio_Sakurai_summary.pdf

Hokkaido University Collection of Scholarly and Academic Papers : HUSCAP

内容要旨

論文題目「ル・クレジオにおける小説世界―個人の危機から文明の危機へ」

櫻井　典夫

本研究の目的と方法

本研究は、今日のフランスを代表する作家ジャン＝マリ・ギュスターヴ・ル・クレジオ（J. M. G. Le Clézio, 1940-）の小説世界の変遷について考察したものである。1963 年の『調書』によるデビュー以来、ル・クレジオは、今日に至るまで継続的に作品を発表し続けている。しかし、作品の舞台や登場する人物、また物語の世界を織り成すル・クレジオの文体は、その活動の進展のさなか様々な変化を見せてきた。その変化のうち、本論で主に取り上げ考察の対象としたのは、1970 年代の作品に読み取ることが可能な変化である。

デビュー作の『調書』（1963）以降、1960 年代に発表された作品の多くは、ル・クレジオ自身の分身を思わせる青年を主人公とし、日常生活の中で彼らが感じる苦痛を媒介に、世界が意味とまとまりを欠いたカオスへと変じていく様が描かれていた。ところが、1970 年代半ばに発表された『向う側への旅』（1975）や、短編集『モンドー』（1978）といった作品では、主人公の少年少女たちと、彼らを取り巻く環境とのあいだの生き生きとした相互作用が描かれるようになるのである。これらの作品では、1960 年代の作品を特徴付ける苦痛に満ちた表現は和らぎ、かつてあれほど待望されたカオスの到来はもはや期待されてはいない。これらの作品で優勢なのはむしろ、環境とのあいだに結ばれる、常に破壊的契機を秘めた関係のなか、均衡の取れたコスモスを維持し続けることへの気遣いなのである。

1970 年代半ばに、ル・クレジオの小説世界に起きたこの変化は、先行する作品によって構築された世界観の修正を迫る極めて大きな変化であったといえるだろう。それでは、この大きな変化をもたらした原因はいったい何か。この問いについて考察する上で本論が着目するのは、1960 年代末に開始されるル・クレジオとアメリカ先住民族の交流である。1968 年、兵役代替義務を果たすためメキシコに赴任したル・クレジオは、そこでアメリカ先住民と出会うことになる。この出会いをきっかけとして、アメリカ先住民の文化に対するル・クレジオの関心は次第に昂じてゆき、遂には、パナマのジャングルに暮らす先住民たちと生活をともにするまでに至るのである。本論は、ル・クレジオがメキシコに到着した 1967 年から、パナマでの共同生活を終える 1974 年までの間におけるアメリカ先住民との交流をル・クレジオの「インディオ体験」と定義し、ル・クレジオの活動における「インディオ体験」の重要性を明確にすることが目指される。

ル・クレジオの活動における「インディオ体験」の意義を考察する上で、本論ではル・クレジオの活動期間を、「インディオ体験」以前の初期（1963-1967）、「インディオ体験」期間（1968-1974）、「インディオ体験」以降（1975-1992）に三分し、原則としてこの時代区分に則った、通時的な作品の読解を行う。本論において通時的読解を採用する理由は、「インディオ体験」以降の作品の特徴を初期作品にあてはめて論ずるといった共時的な読解では、「インディオ体験」の重要性が看過されるばかりか、初期作品の本質としてあったル・クレジオの問題意識もまた捉え損なわれるものと考えられるためである。このような理由から、本論は、通時的読解に基づき、ル・クレジオの初期作品の本質にあった問題意識との関連において「インディオ体験」の重要性を明確にし、この一連の流れの中で「インディオ体験」以降のル・クレジオの活動の展開を説明することが目標とされる。この目標のため、本論は以下のような構成をとる。

第Ⅰ部「個人の危機」

第Ⅰ部では、「インディオ体験」の影響の重要性を示すために、「インディオ体験」以前のル・クレジオ作品の本質としてあった問題意識を明確にすることが目的とされる。

第Ⅰ部で取り上げる作品は、デビュー作である『調書』（1963）に始まり、『発熱』（1965）、『大洪水』（1966）、『物質的恍惚』（1967）、『テラ・アマータ』（1967）と続く作品群となる。本論ではこれらの作品群をル・クレジオの初期作品として定義し、これら初期作品に通底する重要な主題として「狂気」についての考察を行う。第Ⅰ部第１章・第２章では、初期作品において「狂気」が極めて重要な問題であることを、先行研究を交えながら確認し、初期作品の「狂気」の特徴とその本質についての考察を行う。第３章では、『物質的恍惚』（1967）と『テラ・アマータ』（1967）の読解を通じて、「狂気」を主題に執筆を続けていたル・クレジオ自身が、作家生命の危機ともいうべき状況に陥っていくことが確認される。

第Ⅱ部「シャーマン化のプロセスとしてのインディオ体験」

第Ⅱ部では、初期作品の問題意識が「インディオ体験」によってどのように変化したのかを考察することが目指される。

第Ⅱ部で扱われるのは、「インディオ体験」が進行するなかで発表された作品であり、具体的にはそれは『逃亡の書』（1969）、『戦争』（1970）、『ハイ』（1971）、『巨人たち』（1973）、『向う側への旅』（1975）となる。厳密にいえば、『向う側への旅』の出版は本論で定義する「インディオ体験」の期間にはおさまらないが、その内容が「インディオ体験」の影響を強く感じさせることから、第Ⅱ部での考察の対象とする。第Ⅱ部の目的の一つは「狂気」の治癒過程として「インディオ体験」を論じることである。そのため第１章・第２章では、「インディオ体験」開始の直後に発表された『逃亡の書』（1969）と『戦争』（1970）の読解を通じて「狂気」が快復へと向かう兆候を読み取ることが目指される。第３章では、インディオのシャーマン（呪医）が行う「ハイ（歌の祭り）」に着目し、この儀礼について書かれたル・クレジオの『ハイ』（1971）の読解を通じて、初期の「狂気」が祓われた理由を考察することが目標とされる。

第Ⅱ部第４章は、本論における一つの転換点となる。ここまでは主にル・クレジオの「インディオ体験」を「狂気」の治癒の観点から考察してきたのに対し、これ以降は、ル・クレジオ自身がシャーマンとなるための「イニシエーション」として「インディオ体験」が捉えられていくことになる。この目的のため、第４章では、宗教学、人類学的なシャーマン研究を援用しながら、「イニシエーション」と「インディオ体験」の関連についての考察がなされる。

第Ⅲ部「文明の危機」

第Ⅲ部では、「インディオ体験」以降、ル・クレジオが西洋社会に対してとる立位置を明確にすることが目標とされる。これに加えて、自伝的作品の登場という 80 年代半ばにおきたル・クレジオの活動における大きな変化を、「インディオ体験」との関連で論じることが試みられる。それにより、80 年代におけるル・クレジオの活動の二つの変遷（西洋批判・自伝的作品の登場）が共に、「インディオ体験」という本質的変化の派生として、連関的に捉えられる性質のものであることを明らかにすることが目標とされる。

本章で取りあげるのは、80 年代以降に発表された『砂漠』(1980)、「ロートレアモンの夢」(1980)、『黄金探索者』(1985)、『ロドリゲス島への旅』(1986)、『メキシコの夢』(1988)、『パワナ』(1992)である。「インディオ体験」後の作品を『パワナ』（1992）までとしたのは、この作品の読解によって、シャーマン化の過程としての「インディオ体験」の要点を、ほぼ論じつくすことが可能だと考えるためである。第Ⅲ部第一章では『砂漠』(1980）と「ロートレアモンの夢」の読解を行う。これら二作品の読解を通じて、「インディオ体験」以降のル・クレジオ作品における「夢」の重要性を指摘し、その象徴的役割についての考察を行う。第２章では、『ロドリゲス島への旅』(1986)の読解を行う。80 年代半ばに登場した自伝的小説『黄金探索者』（1985）に付随するかたちで発表されたこの小品の読解を通じ、自伝的作品の執筆もまた「夢」の象徴的な働きによってなされたことを明らかにする。第３章では『メキシコの夢』（1988）の読解を通じて、ル・クレジオの西洋批判の要点を明らかにし、「インディオ体験」以降、ル・クレジオは西洋社会の何を問題としているのかを、ル・クレジオが理想化する「インディオ」像との対比において明確にすることが目指される。第４章では『パワナ』（1992）の読解を通じて、作家＝シャーマンとしてのル・クレジオが、西洋文明に危機の兆候を見て取るとともに、呪術的な所作を用いてその危機を回避しようとしている様を浮かび上がらせることが目指される。

結論

ル・クレジオにとって「インディオ体験」とは初期の「狂気」の治癒の過程であるとともに、自らがシャーマン化するためのイニシエーションであった。「インディオ」と「呪術的思考」を共有することで個人の危機を脱したル・クレジオは、「インディオ体験」によって獲得した「呪術的思考」との対比において、「合理的思考」をその本質として発展・繁栄を遂げた現代（西洋）文明の危機を論ずる作家へと変貌したのである。